

ペシャワール会報

No.56



ペシャワール会 〒810-0041 福岡市中央区大名
一丁目一〇二五 上村第二ビル三〇七号
電話・FAX 〇九二(七三二)一三三七二

- | | |
|-------------------------|------------|
| ●対立越える不動の基地を..... | 中村 哲 |
| ●97年度会計報告..... | ペシャワール会事務局 |
| ●独自の支援の広がりを見た一年..... | 村上 優 |
| ●十五年の歳月の重み..... | 高松 勇雄 |
| ●会の「新時代」への準備に奔走中です..... | 小林 晃 |
| ●今こそ目の前の患者と向き合う時..... | 藤田千代子 |
| ●トム君との二ヶ月..... | 林 達男 |
| ●満開の桜を待ちわびながら..... | 五井泰弘 |
| ●十八年ぶりのカイバル峠..... | 岡崎ヒロ子 |
| ●人々との出会いが印象的でした..... | 巻島規之 |
| ●瞬く間に過ぎた三週間でした..... | 石松須美子・鎌田興代 |
| ●モスクの静寂..... | 永田 智美 |

木のムフタルと石のマリク *表紙絵 甲斐大策

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

ペシャワール会 インターネット

ホームページ <http://www1.meshnet.or.jp/~peshawar/>
電子メール peshawar@mx.meshnet.or.jp

対立越える不動の基地を

現地活動は新たな時代に

外国人が現地の欠点をあげつらい、批判したりあざ笑ったりすることはたやすい。しかし、目を凝らして見れば、小は院内の対立から大は核実験に到るまで、彼らの弱さは実は私達の内部にもある弱さではなかったろうか。この中で、私たちの活動が、対立を融和に、敵意を平和に転化し、金や権力で揺るがぬ不易のものを求め、確実な事業を通してそれを実証しようと思っている。新たな出発は、時代に対する一つの挑戦である。

PMS (ペシャワール・メディカル・サービス) 院長
JAMS (日本・アフガン医療サービス) 顧問医師

中村 哲

1997年度を振り返って

多忙な一年であった。月日の流れるのは早いものである。ペシャワール会の現地活動は、十五年を経過して第一期を終え、次期三十年に備えようとしている。これに合わせるように、一九九七年度は内外で劇的な動きが重なった。もはや、「流動的情勢」が常態となり、追われるように時間が過ぎ去ったような気がする。

どんな生活も、どんな場所も、それなりに世界の縮図である。しかし、ペシャワールでは、人間の本质と世界について考えさせられる劇的な光景が次々と展開する。九七年度は、まさに過去十五年の総決算といえる状況であった。はしなくも露呈した悲観的な実情を述べれば、枚挙に暇がない。やや誇張すれば、およそ人間の弱さを示す、ありとあらゆる困難と悲劇に遭遇した。盗賊や戦争など、眼前の命の危険ならまだ分かりやすかった。だが今や我々の敵は、裏切り、嫉妬、疑い、敵意、無理解、残虐、物欲、金銭への妄執、名誉欲、誹謗中傷、傲慢、臆病、怠惰——およそ人間内部の全ての弱さとの対決であったと、抽象的な言い方を許していただきたい。

それでも、何のために、ここまで苦勞を重ねなければならぬのか、少しは洞察を得たような気がする。私たちは、この世界的な混乱の中で、人間そのものと静かに向かい合っているのである。外国人が現地の欠点をあげつらい、批判したりあざ笑ったりすることはたやすい。実際、技術面だ



完成を待つPMS新病院

けでも、ごく基礎的な改善に膨大な精力を投じなければならぬ。子供だましの扇動で人々は容易に動揺する。対立するグループをまとめるのは尋常ではない忍耐を要する。しかし、目を凝らしてみれば、小は院内の対立から大は核実験に到るまで、彼らの弱さは実は私たちの内部にもある弱さではなかったろうか。罪のない者のみが石を投じなければならぬ。殆どの外国人プロジェクトは惨憺たる結末に終わったが、だからこそ我々の存在意義があることを強調したい。もし全てが優



多数の参加者の下開かれた開院式典

等生的に進むなら協力は無用である。

確かに状況は暗い。人間の本性に対する過剰な信頼、科学技術への楽天的な信仰は、世界的な規模で打ち壊された。ペシャワールでは、それらが漫画的に拡大されて見える。身近な核戦争の恐怖は、世紀末的な不安を蔓延させた。この中で、私たちの活動が、対立を融和に、敵意を平和に転化し、金や権力で揺るがぬ不易のものを求め、確実な事業を通してそれを実証するための希望となっている。新たな出発は、時代に対する一つの挑戦

である。

一九九八年度も力を合わせて難局を切り抜けてゆきたい。

1997年度の概況

九七年度は、最大の試練の年であった。この十五年の間に堆積した弊風を一掃し、日本国内の経済停滞と現地の政治的混乱・インフレが進行する中で、次期三十年へ向けて本格的な再編成が着手された。最も多忙な年になったといえよう。困難を極めたのは、アフガン・プロジェクト(JAM S-日本アフガン医療サービス)とパキスタン・プロジェクト(PLS-ペシャワール・レプロシー・サービス)の統合である。

この統合の要になる筈の「PMS(ペシャワール会メディカル・サービス)新病院」の建設も難航し、本格的に着工できたのは一九九七年五月を過ぎてからであった。当初危ぶまれた病院建設基金は、日本側の多大の努力によって目標額を達成、開院式を四月二十六日に行った。六十余名のペシャワール会関係者の現地訪問は画期的で、現地にも大きなインパクトを与えたが、円の下落とインフレによって完成が遅れており、九七年度内移転は実現せず、一九九八年九月に延期された。

とは言え、これを機に十五年の間に蓄積された経験をもとに、新病院に拠って教育・診療態勢を一新、長期活動のための財政的配慮が緊急課題となった。日本からの長期ワーカーを増員、ハンセン病診療と共に、より組織的な臨床教育、より効

率的なフィールドワークと僻地診療が準備されつつある。

一九九八年五月から六月にかけてインド・パキスタンの核実験が行われ、両国の関係が緊張、パキスタンの政情は騒然とした。一方アフガニスタン北部は二度の大地震に見舞われて数千名が死亡、目的地のひとつ、バダクシヤンは壊滅的な打撃を受けた。しかし、ペシャワールは概ね平穏で、今のところ我々の計画に大きな影響はない。

パキスタン北西辺境州と

アフガニスタン情勢

一九九五年以来、タリバン(神学生Ⅱ原理主義グループ)勢力は依然としてパシュトゥン部族を中心に、アフガニスタンの三分の二を支配している。厳しいイスラム法の統治下で治安は安定しているが、都市知識層・中間層は殆どがカブールを脱出、ペシャワールに逃れている。このため再建は遅れ、都市部を中心にする貧困層は劣悪な環境におかれている。

カブールやジャラバードには一〇〇団体を越えるNGOがいるが、見るべき活動はない。アフガニスタン北部では、パンジシェールのマソードやハザラ族のイスラム統一党が割拠してタリバンと対峙、こぜり合いが続いている。アフガニスタンの復興はまだ遠いようである。

一方、パキスタンではカシミール問題をめぐって対インド関係が悪化していたが、九八年五月、インドが地下核実験を行なうに及んで緊張は頂点

に達した。この報復にパキスタンが同様の核実験を強行、ここに戦後世界を律してきた秩序に終止符がうたれた。それでも、ペシャワールや北西辺境州・アフガニスタンでは、概ね人々は無関心であり、その日の生活に精一杯であるのが実情である。通貨ルピーも下落を続けており、国庫の大部分をODA（政府開発援助）に仰ぐパキスタンは、IMF（世界通貨基金）や日本からの借款が停止すれば、小麦の輸入さえ危うい状態である。何れ国内の混乱は避けられない。

今後どのような展開があるのか予測し難いが、経済制裁などで庶民の生活はさらに窮迫するだろう。日本からの補給は更に困難が予想される。

PMS病院の建設

既に報告したように、一九九五年四月に近辺の家主に移転を要求されて以来、病院建設は、現地プロジェクトにとって最大の懸案であった。不動の基地がなければ、長期活動はおぼつかない。そこで、一九九六年十二月に連邦政府登録の国際団体「Peshawar kai Medical Services」を、同時に北西辺境州政府には「Peshawar kai Rehabilitation Extension Programme」という名称の「社会福祉法人を発足させた。これは、①土地と建築物の所有はパキスタン国籍の団体に限られること、②アフガニスタンとパキスタンの活動を同一傘下に収めなければ、基地病院の機能化が危ぶまれることによる。

この法的基盤の上に、一九九七年一月、建築が

開始された。かくして「病院建設」は、単に基地病院の確保のみならず、旧態勢を一新してパキスタン・アフガニスタン両チームを統合、かつ長期継続のための経費節減（ちなみに病院の家賃は年間予算の一五%を占める）、臨床教育の整備、日本人長期ワーカー確保、日本と現地との交流促進など、名実ともに新態勢発足の要となる重大な意義を帯びたのである。しかし、付近住民の反対運動などで二転三転、最終的にペシャワール郊外の農村に土地を買収して実際の建築が開始されたのは、九七年六月になってからであった。

建設は予期せぬ長期の雨季、機材の高騰、日本からの補給困難、内部の足並みの乱れなどで遅れに遅れた。一度は中途で放棄され、土地購入はもちろん、最終的に設計から施工までは日本側ペシャワール会単独で行わざるを得なかった。四月二十六日にやっと基本部分を完成、日本から六十余名を迎えて「開院式」が執り行われた。実際には工事は日本からの補給を頼みとしていまだ進行中で、移転は九八年九月中旬となる。

新病院の概観は以下の通り。

病床数 七〇床

予定外来数 一〇〇〜二〇〇名/日

病院敷地面積 七、二八八㎡

病院建築面積 三、六〇〇㎡

住所 Peshawar - kai (Japan) Medical Services

Abdullah, Canal Road,

University Town, Peshawar

連絡先 TEL 091-844583 FAX 091-843600

総工費 約六八〇〇万円



開院式でスピーチをする中村医師

うち約九〇%を充足。最低必要部分を八月までに完成後、移転予定。

なお、院内にはスタッフの訓練、教育施設、日本人（ペシャワール会員や医療関係の訪問者）のための宿泊施設も含まれている。

これによって、旧JAMS（日本・アフガン医療サービス、在ペシャワール）病院をPMS病院に統合、一部は「PMS分院」としてカブル避難民のための外来機能だけを残し、主にアフガニスタン内部の三診療所の統括を行う。

パキスタン・プロジェクト

旧PLS (Peshawar Leprosy Service) は、四月二十六日を以てPMSに統合された。以後「PMSのパキスタン・プロジェクト」と呼称する。関係機関と協力は続けているが、ハンセン病の合併症をともに治療できるのは、全北西辺境州とアフガニスタンで、PMS病院以外になくなった。九八年四月二十六日の開院式に出席した日本側

訪問団の影響は画期的で、北西辺境州大統領（知事）・日本大使・JICA（国際協力事業団）パキスタン事務所も列席した。これによって、行政側は一挙に好意的となり、めんどろな政治的折衝などの困難が減った。

一九九七年度は、建築に忙殺されて、ややフィードバックが鈍ったが、それでもコーヒスタン地域に着手した。チトラールでは、一九九五年以来のヤルクン川流域の踏査と定期診療調査をほぼ完了し、マスツジ診療基地が確保された。

診療スタッフの訓練は、かなりの被訓練者を処分したが、綱紀粛正の上でやむを得ない措置であった。それでも一九九八年四月から、より組織的に実施、現在九名が学んでいる。

一九九七年度の診療実績は別表の通り。

アフガニスタン・プロジェクト

旧JAMS (Japan Afghan Medical Service) も、



ラシュト診療所で（右は小林医師）

四月二十六日を以てPMSに統合された。以後、同様に「PMSのアフガニスタン・プロジェクト」と呼称する。「JAMS」の名称はPMS支部として残り、アフガニスタン国内の山村無医地区と、越境もできない貧民を対象にする診療態勢の足固めを行う。

PMSへの統合の背景

PMSへの統合に対して、相当の抵抗がペルシヤ語系のアフガン人側からあったが、ペシャワール会活動の主旨を貫くべく、予定を強行した。一九九八年度は新病院を足掛かりに統合体制をさらに完成し、活動を強化する予定である。

現在アフガニスタンは、三分の二を支配下に置く「タリバン（神学生）」勢力、北部の「反タリバン」諸勢力が割拠し、小ぜり合いを続けている。だが、農村部は比較的安定しており、都市部の方が困っている。特にカブールの貧困層は最悪であり、ペシャワールに来れる中間層はまだ恵まれているといえよう。

元来PMSは、アフガニスタン国内最大のハンセン病多発地帯・バミヤンを目指すと共に、最貧層の診療を対象としている。しかし、旧JAMS病院（ペシャワール）では、難民大量帰還後の一九九三年以来、次第にカブールからの都市中間・富裕層が主な患者となりつつあった。加えて、旧JAMSスタッフの大半がカブール市民、それもバンジシール出身者が多く、当然アフガン・プロジェクトの予算の相当部分がこれらカブール

からの患者達に割かれるようになっていた。更に、しばしば「アフガン・ナショナリズム」で排他的な集団を形成してパキスタン側と対立した。また、日本側管理の緩んでいたこの数年で診療技術の質が低下していたことも否めない。

「PMS統合病院」の背景は、このような事情も絡んでいる。ペシャワール会は今後も、あくまで国境を越えた活動、ハンセン病と最貧層を対象とする方針を堅持する。

一九九七年度は、無医地区診療所に勢力を投入させ、旧JAMS病院の規模縮小を行った。しかし、本旨はプロジェクトの縮小ではなく、むしろ強化である。旧JAMSペシャワール病院は、一九九八年度中に更に縮小、最貧層へのサービスの方策を模索させている。九八年六月に小林医師が実情の調査に乗り出した。

1998年度事業計画

1 PMS病院

予期せぬ諸事情が重なり、あと少しの所で完成が遅れている。九八年九月初旬までに基本部分の内装を完了して移転予定。既述のように次期数年の活動は、この病院完成を前提としている。現在、全力を挙げて取り組んでいる。

病院においては、教育・診療態勢の充実だけではない。中産階級以上の一般診療は料金制を実施、病院の半独立採算性の可能性を探り、日本側の財政負担を大幅に軽減する予定である。これによつ

て、日本からの補給を、ハンセン病などの機能障害を抱える患者、極貧層、無医地区の住民の診療に集中することが可能になる。

2 チトラール・ラシユト診療所

既に一九九五年から調査を開始、夏期定期診療による偵察をほぼ完了させた。九八年六月より常駐基地を設営開始。早ければ一九九九年一月から常時七名の常駐態勢をとる予定である。

3 コーヒスタン定期診療

インダス・コーヒスタン地域は深い山岳地帯で、狭い谷あいに人口が密集している。遠隔地であると共に、治安の面から医療活動が殆ど及んでいない。一九九七年二月の偵察診療以来、次第に実情が明らかとなってきた。ハンセン病の一大多発地帯であると同時に、腸チフス・マラリアなど感染症の巣窟である。パキスタン北西辺境州政府の協力で、放置されているBHU (Basic Health Unit) の施設を譲り受け、駐留基地とする。但し、一九九八年度は余力がないので場所を確保して定期的な偵察診療を重ね、さらに事情を調査する。

4 診療助手の養成・教育態勢の強化

ペシャワール着任以来、自前の現地スタッフ訓練は、絶えざる課題であり、試行錯誤の連続でもあった。まだまだ不十分ではあるが、ペシャワール会PMS病院の建設によって、教育スタッフを充実し、組織的なカリキュラムを実施できるようになった。特に看護スタッフの増員と質の向上は

急務であり、一九九八年度の大きな目標の一つに掲げている。年度末までに訓練生二十五〜三十名を予定。成功すれば、将来のアフガニスタン復興にも必ず貢献することになる。

5 日本からの研修生の受け入れ

年度末までに教材、教育要員、宿泊設備を新病院内に整え、医学生などの短期研修受け入れを一九九九年度から実施予定。現地と日本のつながりを強めるだけでなく、日本で最近増加しているマラリアなど「輸入感染症」について充分に学ぶ機会を与えることも出来る。

6 日本からの長期ワーカー増員と待遇改善

一九九八年六月から、藤井卓郎氏(三十五歳、イスラマバード語学院・ウルドゥ語科を卒業)が長期ベースで着任の予定。PMS病院でペシャワール会現地連絡員の任に当たる。今後とも、長期ワーカーの存在無しに現地事業は困難であるので、彼らが安心して長期の仕事にうちこめるよう十分な配慮が必要になってきている。これも今後の大きな課題である。

▼未使用の切手・ハガキを！▲

*会報の発送費に、年間百万円以上がかかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。

(古切手は扱っておりません)

表紙をめぐる小さな物語 19

木のムフタルと石のマリク

甲斐大策

この数年、南へ向かう鴉がふえていた。
「兄貴、モルグ・アウイが山を越えている……。」
「ア、昨日も見た……。」
「オレ達もクナールへ戻るのか……。」
「ウン、そうだな……。」
兄弟がパンシエール側でエメラルド掘りの手伝いを始めて十六年が過ぎていた。
クナール川西岸の集落は、痕跡すらなかった。隣人だった姉妹とは親が決めた幼い姻戚関係で同姓だったが、その一家の消息も知るすべがなかった。

一九八二年五月のある朝、兄弟はオトリ用の木鴨を隣の谷へ届けることになり、桑材の飾り屏を背にジャラーバードへ下る父を淵の岸で見送った。それが父を見た最後である。この日、旧政府軍機によるナバーム爆撃が始まったのだった。
タジクの血をひく家具職人だった父のもとで、十才を過ぎた頃、兄は見事な木鴨をつくった。弟は、石を積んで野鴨にさせるのが得意だった。ヒンドウクシ系の溪流では、逆台形に断った丸太に首と頭に見たてたふた股の枝をつけ、流れに支柱で固定するか浅瀬の石を重ね、それらしく見せようとするのが一般的なデコイである。

浮くようにつくった兄の木鴨は、淵に漂う野鴨達に、弟の石鴨は岩陰に睡る鴨達に見え、人々は兄を「チュールビイ(木の)ムフタル」弟を「サンギイ(石の)マリク」と呼んでいたのだった。

二人は崖つづちに腰を下ろし、対岸の上方の峰から現れる月を見た。五、六メートル下の淵に月が映る。
ヒン、ヒン、ヒン、ヒン、ヒン、ヒン……
夜気を切る羽音が下ってくる。二人は身を固くし「岩」になる。眼前を下流へ向う五羽の野鴨の嘴と眼が光っていた。

「ヒン、ヒン、ヒン……。」
「グウェー、グウェー、グウェー……。」

弟は、下歯を上唇にあて軽く息を吐き羽音を真似て微笑み、兄は声を真似た。

二人の心に、今後オトリをつくる気持はないようだった。

1997年度 診療業績

1997年度の診断実績は以下のとおりで、総計156,029名が診療を受けた。

診療所／病院	外来数	外傷治療	入院	鍼灸治療	巡回診療
旧PLS病院 (ペシャワール)	10,174	3,626	580	214	753
旧JAMS病院 (ペシャワール)	41,657	2,245	619	3,245	1,510
ダラエ・ヌール診療所	30,363	1,861	—	—	—
ダラエ・ピーチ診療所	32,131	1,358	—	—	—
ヌーリスタン・ワマ診療所	24,452	1,241	—	—	—
総計	138,777	10,331	1,199	3,459	2,263

検査数内訳	血液一般	尿一般	便一般	らい菌	リシュマニア	その他
旧PLS (ペシャワール)	1,266	1,315	976	444	226	775
旧JAMS (ペシャワール)	5,603	5,744	5,497	27	3,455	12,505
ダラエ・ヌール	2,664	2,437	3,149	不明	94	502
ダラエ・ピーチ	2,906	2,239	3,568	2	75	1,064
ヌーリスタン・ワマ	2,773	2,638	3,166	不明	15	424
総数	15,212	14,373	16,356	473	3,865	15,270

入院サービス内訳

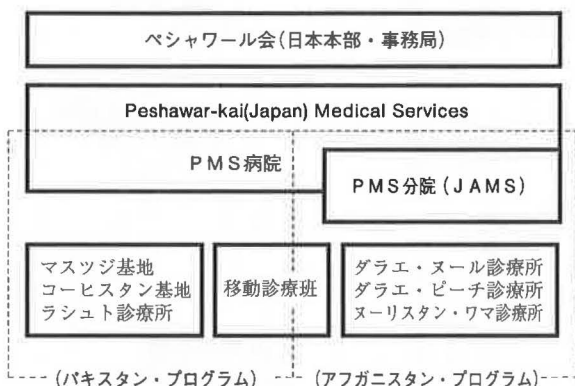
	入院数	手術数	理学療法例	その他
旧PLS (ペシャワール)	580	66	2,304	医学生受講 134名
旧JAMS (ペシャワール)	619	1,172	0	

*入院サービス「JAMS・その他」の内訳

X線単純写	3,090	肝機能など生化学的検査	1,176
腹部エコー	2,766	胃内視鏡	640
心電図	929	病理組織検査	175
細菌学的検査	1,371	免疫学的検査	1,134
結核菌検査	326	その他	898

PMS (Peshawar-kai Japan Medical Services) の現状

現地プロジェクトとPMS新病院下の管理体制



PMSの現況

合計	PMS本院・ パキスタン計画	分院/ アフガニスタン計画
スタッフ総数 143名 (うち医師) (20名) (日本人) (3名)	67名 (被訓練生 9名) (8名) (3名)	76名 (うち5名が9月転出) (12名) (なし)
一日外来診療能力	所在地	カバーする 人口
PMS本院 ※ ¹ 100-150名	ベシャワール	(不定)
PMS分院 (JAMS) 約100名	ベシャワール	(不定)
ダラエ・ヌール診療所 約100名	ニングラハル州	約20万名
ダラエ・ピーチ診療所 約80名	クナール州	約10万名
ヌーリスタン診療所 約60名	ヌーリスタン・ワマ	約5万名
移動診療班 50-100名	(不定)	(不定)
※ ² ラシュト診療所 約50名	チトラール北部	約2万名
マスツジ診療基地	(ラシュトへの中継基地で特に診療行為は行わない。)	

※¹ 実際は現在50名で、教育に時間を割いている。年度末に同能力に達する。
 ※² ラシュト診療所は11月から予定。

ベシャワール会・北西辺境州支部
福祉法人 PREP

(Peshawar-kai Rehabilitation Extension Programme)

ワーカー派遣事業

一九九七年度は、以下の人々が現地で協力を行った。全体に、現地体験と臨床経験の豊富な長期ワーカーが増して、診療の質向上と共に、PMS新体制発足に大きな貢献をした。現地はもちろん、これら長期ワーカー達の協力なしに、この難局を乗り越えることは出来なかっただろう。心から感謝したい。

今後、さらに日本側との交流を深め、新施設では日本人医療関係者の熱帯病や輸入感染症などを学べる場を提供する予定。

名前	派遣期間	職業	所属
藤田 千代子	1990年9月～現在	看護婦	元福岡徳洲会病院
小林 晃	1997年2月～現在	医師	徳之島徳洲会病院
林 達男	1997年11月～98年4月	鍼灸師	元新光園勤務
松本 繁雄	1998年3月～98年5月	検査技師	元邑久光明園

●1997年度中に 寄付をいただいた団体

(医)愛成会 東野産婦人科
朝倉記念病院
油山病院
うら梅の郷会
(株)ヴィジュアルフォークロア
大分県立病院県友会
大分県立病院院友会
勝手に支援会
粕屋歯科医師会
河合塾
関西福中・福岡同窓会
関西学院宗教センター
看護学生自治会
九州テクシス(株)
北九州アジアを考える会
(社)北九州市八幡医師会
北九州足立ライオンズクラブ
熊本YWCA
久留米ユネスコ協会
香草舎
古賀市役所
国際ソロプチミスト福岡南
国際ソロプチミスト北九州一西
国際ソロプチミスト福岡一東
国際ソロプチミスト日田
国立肥前療養所
埼玉医療生活協同組合
駿和物流株式会社
正福寺
島郷調剤薬局
白石共立病院
駿台予備校市谷校舎
西南学院高校母の会
西南学院短大宗教主事室
西南学院中学校母の会
西南学院
西南学院経済学部1年EBクラス
西南高校インターアクトクラブ
西南学院幼稚園
西南学院大学
西南学院高校
西南学院中学
西陵高校生徒会
全通信労組愛知地区本部
全通信労組熱田支部
費和不動産
筑紫女学院中学、高校
東郷信愛幼稚園
徳洲会JAMSの会
徳之島徳洲会病院
内船寺婦人部
中地区労センター
名古屋サウスライオンズクラブ
名古屋徳洲会病院
名古屋ライオンズクラブ
(株)鴨滝組
野崎ネパールの会
馬場病院とB.B.ゴルフコンペ
馬場病院互助会
檜原こひつじ幼稚園
福岡東京九栄ゴルフ会事務局
福岡高校生徒会
福岡高校同窓会
日本基督教会福岡城南教会
福岡桜ライオンズクラブ
福岡女学院中学校宗教部
福岡女学院幼稚園
福岡西ロータリークラブ
福岡YWCA
福中・福岡ゴルフ会
ボプラ平尾駅前店
毎日新聞大阪社会事業団
松ヶ丘病院
緑の丘いわと
八尾徳洲会病院 理学療法室
論楽社
香住ヶ丘バプテスト教会
香住ヶ丘バプテスト教会光の子
熊本白川教会
古賀五楽ヶ丘キリスト教会
佐賀めぐみ伝道教会
品川バプテスト教会婦人会
すみのの会
西南学院バプテスト教会
日本キリスト教団仙山教会
大名町カトリック教会
日本基督教団 津屋崎教会
天神聖書集会
東八幡キリスト教会
福岡国際キリスト教会
日本基督教会福岡城南教会
福岡聖書研究会
福岡中央教会
福岡中部教会 壮年会
福岡ベタニヤ村伝道所
福岡南教会
別府聖書研究会
日本キリスト教団藤枝教会

●1997年度ペシャワール会会計報告

一般会計

[収入の部]	
1 会費・寄附①	35,691,750
2 補助金等	25,755,000
うち外務省補助金	7,770,000
国際ボランティア貯金	15,905,000
救援財団等	2,150,000
3 事業収入等	1,875,500
うち絵ハガキ販売	150,000
講演会謝礼等	1,725,500
4 利息雑収入	410,421
5 マラリア基金繰入	8,445,687
年度収入計	72,181,352
前年度繰越	3,290,286
収入計	75,471,638

[支出の部]	
1 現地協力費	66,296,531
うち1) JAMS 運営費②	39,422,161
2) PLS 運営費③	20,190,067
3) 現地ワーカー費④	3,800,161
4) 渡航費	1,220,790
5) 通信費	639,627
6) 国内活動費⑤	1,023,725
2 広報費	2,311,026
3 事務局費	2,709,337
年度支出計	71,316,894
次年度繰越	4,154,744
支出計	75,471,638

外務省補助金・国際ボランティア貯金内訳	
外務省補助金	
JAMS 運営費 (バキスタン)	7,700,000
国際ボランティア貯金	
JAMS 運営費 (アフガニスタン)	10,842,000
PLS 運営費	5,063,000
合計	15,905,000

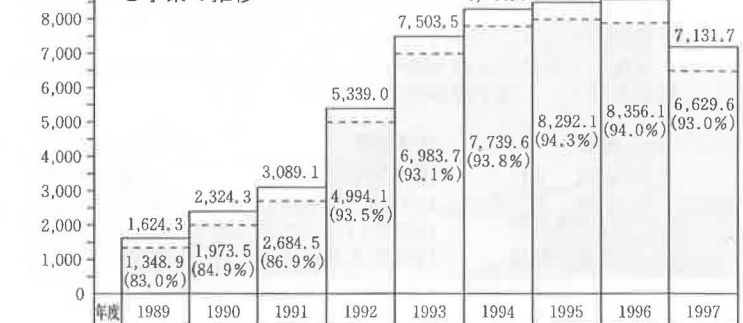
特別会計「新病院建設基金」

[収入の部]	
会費・寄附	28,784,907
会費・個人	6,702,763
会費・団体	13,024,134
寄附・個人	3,453,120
寄附・団体	2,301,698
病院・個人	2,766,030
病院・団体	182,000
病院・非会	355,162
受取利息	11,319
年度収入計	28,796,226
前年度繰越	24,600,736
収入計	53,396,962

[支出の部]	
建設資金	44,692,736
送金手数料	50,355
支出計	44,743,091
次年度繰越	8,653,871

単位(万円)

●事業の推移



(個人会費寄 685 1,097 1,322 2,202 2,722 3,096 3,503 3,283 2,968件)
(団体寄付 55 91 98 114 159 191 145 150 221件)

'97年度会計報告

- ①個人会員 二九六八件、団体 二二二件
- ②JAMS医薬品、人件費他
- ③PLS医薬品、人件費他
- ④住居費等
- ⑤国内研修費用、講演旅費等

●1997年度事業額 (支出ベース) 71,316,894円

事務局費(家賃等)
2,709,337円
(3.80%)

広報費(会報発行)
2,311,026円
(3.24%)

現地活動費
66,296,531円
(92.96%)

● 円安、長雨、インフレの余波を受けて — 本格的な病院移転は九月

独自の支援の広がりを見た一年

ペシャワール会事務局長 村上 優

建設資金 — 約一〇〇〇万円が不足

九七年度はPMS新病院建設に明け暮れた一年であった。募金活動は九六年から始まり、病院建設が始まった九七年四月には二八〇〇万円、九八年四月までには更に三〇〇〇万円が集まった。当初は州政府から提供された土地に建設予定であったが、地元・付近住民の反対運動で自前の土地を購入することになり、その時点で一〇〇〇万円の予算超過になった。また急速に進む円安、パキスタンのインフレで建設予算の五五〇〇万円では不足する事態となり、現時点ではすべてが完成するには、これからさらに一二〇〇万円を必要としている。

財政の不足とペシャワールでは考えられなかった記録的な長雨で工事は遅れた。このために教育部門とゲスト用の宿泊部門を除き、診療部門と管理部門を本格的に使用できるのは九八年九月となる予定である。

この募金活動では本当に多くの関係者に、独自の活動をいただいた。ソロブチミスト福岡東、ならびに南の方々にはコンサートを、中村医師の出身地である古賀市の方々には同級生が中心となっ

ての募金活動を、また名古屋サウスライオンズクラブには四十周年記念事業として高額の寄付を、さらに地元の鶴城ライオンズクラブは継続事業として宣伝・寄付活動を、そしてペシャワール会名古屋支部にも独自の活動により支援の輪を広げていただいた。その他、枚挙にいとまがない善意の活動が、個人や団体を通してこの募金につながった。

落成式は無事終了

PMS新病院の開院式典は九八年四月二十六日に予定通り行われた。詳しい報告は他にゆずるが、日本からの参加五十九名に病院の実際を見ていただけたことは、これからの支援に大きな財産になった。全てが完成していたわけではなかったが、この病院を基地としてハンセン病患者やアフガン難民への診療が行われることを理解いただいた。式典では十年以上勤続の九人、新病院建設の功労者の十三人を表彰し、また新病院体制の人事も、中村PMS病院長、小林副院長、シャワリ分院(JAMS)院長、ハンフリー事務部長、ジア診療部長、藤田看護部長を公の場で任命した。

九七年三月にJAMSのシャワリ医師、PLSのハンフリー氏が郵政省の招きで来日した。これ



(左から) ハンフリー氏、北西辺境州知事と共に式典に臨む中村医師

からの事業においてパキスタンとアフガニスタンの協力は必須のものであり、一緒に来日したことには大きな意味があった。パキスタン人とアフガニスタン人の過去の歴史や民族的な対立感情の中で、これを統合してPMS新病院とするには困難もあったが、そのことにこそ日本人の存在の意義や役割がある。九年目に入った看護婦の藤田千代子さん、九七年五月から長期ワーカーとして赴任した小林晃医師、レントゲン技師で鍼治療もされる林さん、技術指導で短期赴任の検査技師・松本さんなど、中村医師だけに依存していた人の交流と支援の層が厚くなった一年でもあった。

しかし、現在会員四〇〇〇人と、支援の輪が広がる中で、日本側の事務局体制もパンク寸前で、若干過労気味である。全てボランティアであるが、コンピュータ入力や、会計処理、資料の整理などを手伝っていただける方を募集している。

●PMS新病院開院式に参加して

十五年の歳月の重み

ベシヤワール会会長 高松勇雄

感動に立ち尽くす

私たち五十九名の一行は、去る四月二十六日行われたPMS（ベシヤワール医療サービス）病院開院式に出席するために、ベシヤワールを訪れた。私にとっては初めて見るベシヤワールである。とうとうやって来た、という思いであった。

地下一階、地上二階、建坪延べ一千坪のPMS病院は、敷地の二千坪とともにすべてベシヤワール会を通じて全国の方々から寄せられた寄付によって建設されたものである。つまりベシヤワール会は、ここベシヤワールの地に、自前の土地、自前の建物としてPMS病院を持つことができたのである。前夜の雷雨が嘘のように晴れ上がった青空の下に堂々たる構えで立つ病院を仰ぎ見て、私は大きな感動と感謝の思いでしばし立ち尽くした。それと同時に、傍らに立つ中村君の面差しに、ここ数日の不眠不休の疲れや式典への緊張感と共に、十五年の歳月の重みと苦闘の陰を見て胸が痛んだ。思えば一九八三年、彼が日本キリスト教海外医療協力会（JOCs）の派遣医としてベシヤワール・ミッシェン病院のらい病棟に勤務することが決まり、九月にベシヤワール会が発足して十五年

が経過した。そして翌年五月二十八日、彼がミッシェン病院の門をくぐってからの十四年間の活動は、年四回発行されてきたベシヤワール会報に詳しい。それは活動といった生やさしいものではなく、苛酷な自然、複雑な民族、熾烈な戦争の中で繰り広げられた血みどろの活動であったに違いない。そしてそこから発せられる彼の言葉が日本全国の人々を動かし、現地の人々の信頼を得て、今日の開院式を迎えることができたといえる。

次の三十年を見据えて

しかし中村君の思いは過去の事績への感傷にひたる暇もなく、これからの三十年を見据えている。歴史上何人も成功したことがないといわれる現地の他民族での共同作業をPMS病院で実現させるのが、彼の、そして我々のこれからの使命なのである。開院式の晩、地元の人たちが「宮殿のような」と形容するパールコンチネンタルホテルで、北西辺境州政府首相招待の歓迎会が開かれた。首相の横に座らされた私に中村君がそっと囁いた。「この仕事のお陰で私は乞食にも天皇陛下にも会うことができました。PMS病院を御殿のような病院にしてみせますよ。」



中村医師に任命証を渡す高松会長

彼のこの情熱はどこから生まれてくるのであろうか。私は秘かに脱帽した。そして彼の『ベシヤワールにて』の冒頭の文章を思い出した。

「目を射る純白のティリチ・ミール（山）は神々しく輝いている。荒涼たる岩石沙漠に点在する緑の村々は、さながら苛酷な自然にひれふして寄生する人間の鳥瞰図である。私は山と対話する。我々は地表をはう虫けらにすぎぬ。いかなる人間の営みもあなたの前には無に等しい。しかしそれでも自分が逆らえぬ摂理というものがあれば、喜んで義務を果たすでしょう。その時の情景と無言の対話は今でも幻覚のように鮮明に脳裡にやきついてる。」

中村君はこの時、ティリチ・ミールの神様に襟髪を掴まれたに違いない。

文字どおりベシヤワール会の節目となったPMS病院の開院式を無事終えて、改めて今日までご支援、ご尽力下さった全国の会員の皆様方、事務局の方々、また現地のスタッフの人々に衷心より感謝とお礼の言葉を述べさせていただきます。

ワーカー通信

*

会の「新時代」への 準備に奔走中です

PMS医師

小林 晃

猛暑到来

ペシャワール会の皆様お元気ですか。こちらではとうとう猛暑が始まりました。例年では四月下旬ごろより暑くなり始めるのですが、今年は四月下旬から五月下旬にかけて、雨が多く大変過ごしやすかったのですが、五月下旬頃から、急に暑くなり始めました。気温は四五度に達することもあり、スタッフハウスの部屋の中の温度計が四〇度以上をさすことも稀ではなくなってきました。頑強を誇った私のお腹もこの暑さのためか、アメーバ赤痢にやられてしまいました。しばらく無理を押して病院に出ていましたが、とうとうダウンしてしまい、しばらく休ませていただきました。

アメーバ赤痢は日本では法定伝染病ですので、日本で発病すると、隔離され、家中が消毒されて大騒ぎになります。しかし、こちらではよくある病気で日本の外来における風邪のようなものです。発展途上国では、アメーバ赤痢の糞子を持ち、菌と仲良く共生している人々は約五〇％に達すると

言われています。しかし早期に治療するとほとんど治る病気ですので心配することはありません。

病で寝ている最中に、『城下の人 石光真清の手記』（全四巻、中公文庫）という本を興味深く読みました。中村先生のこちらでの仕事を目の当たりにして、いろいろな困難に遭遇したときに冷静に情勢を分析して判断するところ、人に対する情けの深さなど、主人公とよく似ているところがあると感じました。また、現地の人々と、本に出てくる登場人物の、単純で怒りっぽいですが義理人情にあつところ等の人間模様も大変似ています。もちろん、本の主人公は明治から昭和の初めにかけての波乱に満ちた満州における諜報活動、中村先生は医師、という職業の違いがあり、当然ながら話の筋も違います。しかし、本の主人公が、馬賊の頭目の一人である増世策という登場人物と交流を重ね、心腹を開いて協議をする所などは、こちらでの活動において様々な現地の人々と協議する中村先生の姿と大変似ているところがあります。現在の日本のような平和な時代と違い、いい意味でも悪い意味でも、明治から昭和の初めにかけての人は波乱に満ちた、大変な人生を送ったものです。さらに粹な人がたくさんいたものだと感じました。妻に聞きましたところ、日本で最近テレビ放映されたそうですが、本の方がずっと面白かったとのことでした。

中村先生の著作のファンの一人として、先生にもこちらでの体験を、もつと文章に書いていただ



シャワリ医師と回診を行う小林医師

きたいと願うのですが、先生の行動を目的の当りにし、会計、交渉、来客の接待、それに募金集め等、あまりにも医者以外の仕事が多すぎて、今はそれどころではないというのがひしひしと感じられます。しかし、あの文才を放っておくのは至極残念なところと感じ、私が中村先生に「もつと文章を書いて下さい」とけしかけたところ、「早く工事現場監督まがいの仕事から離れ、医者に戻るのが先決」と言われました。しかし、今年の九月よりイスラマバードの外語学校でウルドゥ語を修められた藤井さんという方が、ペシャワール会の

ペシャワール支部責任者として来られます。これで先生の負担も大いに軽くなるのではないかと、喜んでいるところです。先生も先日、藤井さんとお会いし、「おお、藤井さんが光って見える」と大いに期待しておられました。

「パキスタンでは優秀なほう」

さて先日四月二十六日、無事に開院式が終わりました。日本大使および北西辺境州の大統領も参加され、日本からも大勢の人が参加されました。北西辺境州の大統領が、スピーチで、原稿にないことですがと断り、「ペシャワール会が大勢のNGOが出たり入ったりする中で、長期にわたり、純粋にアフガン難民のため、難患者のために働いていたことには心より感謝します」という言葉が印象的でした。

夜のパーティには北西辺境州の首相、厚生省からも招待を受けました。官民両方から支持を受け、協力体制は万全となりましたが、これからが大変です。残りの建設、中身の充実など問題が山積みです。開院式に間に合うようにと必死で突貫工事を慣行しましたが、後に点検しますと、一部工事の欠陥がみられたり、当初予定していた予算をオーバーしてしまったことなどが判明しました。当初、五月に新病院への移転を予定していましたが、工事が遅れ、九月に延期となりました。

しかしながら、これに対して不満をのべるスタッフは一人もいませんでした。それもそのはずで、工事が一年二年遅れるのは、こちらの社会ではよくあることで、「我々の新病院はパキスタン国内

の建築としては、大変優秀なほうだ」とみんなが言っていました。やはりこちらは日本的せっかち主義は通用しないところだと改めて感じました。中村先生は、「今後何十年にわたるペシャワール会の活動の基地となる所なので、慎重に残りの工事を進めていきたい」と言っておられました。

JAMSより来た医師たち

さて、PMSの方は新病院に向けて新しい医師が、JAMSより四人来られました。カーブル大学卒業の若い秀才、ズベイドラー医師、モスクワ大学卒業の勉強家、アフマッド・ジア医師、病理担当のイブラヒム医師、それに日本人そっくりのアフガニスタンのハザラ族のデイン・モハammad医師です。これで医師は中村先生と私を含めて九人になりました。

アフガニスタンで医師になるのは大変難しいらしく、アフガン全国で選抜に選抜を重ねて、選抜抜かれた秀才ばかりです。しかしながら戦乱のためまともに臨床教育を受けていないためか、日本の研修医のように、知識はありますが実際の臨床とは余り結びつかないことが多いようです。さらに基本的な清潔操作もまともにできない場合もあり、みていると冷や冷やすることもあります。しかし、症例検討会などの機会を与えると大変熱心に勉強し、その秀才の片鱗を見せることがあり、将来が大変楽しみです。

若い二十八歳のズベイドラー医師は、アフガン国内の混乱によるストレスのためか、顎髭に円形脱毛症を持っていますが、大変勇前で、外來では若い女性患者から多くの指名があります。おしゃ

れでいつも髪型はきちつとしており、いつもしゃれた服を着ています。茶飲み話で、「中村先生も少し見習ったらどうでしょうか」と誰かが遠慮がちに言ったところ、みんなが一勢に頷いていました。現在、彼に腹部エコーの指導をしています。やはり飲み込みが早くどんどん上達しています。

デインモハammad医師は五十歳近い年齢で、今回のJAMSにおける医師の人員整理の対象となっていました。英語は全然駄目、医者としての能力ももう一つですが、性格は大変よろしく、しかも日本人に大変似ていることもあり、どうしても気になりましたので、私情は禁物ですがと断った上で、中村先生にクビにならない方法はないかと頼み込みました。中村先生も気にされていたようで、「将来らいコントロール計画において、ハザラ族のいるバミヤンに行くときに役立つかもしれないし、日々の忙しい病院生活の中で、何人かは、のんびりというだけでホッとするような人材も必要であろう」ということで、医者としては、こちらに来て一生懸命英語で話そうと努力しています。さらに、薬の整理をするためにコンピューターを習いたいと頑張っておられます。このデイン医師は、左手が不自由なのですが、戦場で患者の治療をしているときに左肩に銃弾を受けたそうです。アンバンマンのような優しい顔をしています。ですが、実際には大変勇敢な人だと聞きました。いつになるかは分かりませんが、将来デイン先生の案内で、らいコントロール計画の一環として、アフガニスタンのバミヤンに行くことを楽しみに

にしています。

今年の九月には、医師の募集をし、その中で、試験・面接を行い、優秀かつ人間性の良い若い医師を四人募集することになっています。日本の病院でもそうですが、いつまでも同じ面々で、やる気のある若い医師が入らないと病院が停滞する、と中村先生が言っておられました、その通りだと思います。

患者たちの「その後」

さて先日の会報で書きました、右足が腐ってとれてしまったという患者ですが、右足の切断手術をしたところ、術後血流が悪いためか一部感染をおこしてしまいました。患者はこのまま右足が腐ってどんどん無くなっていくのではないかと絶望



入院中のらい患者を診る小林医師

的になり、大の男が声を出して涙を流していました。しかし、持続洗浄をし、抗生物質を変えたところ、ようやく感染も治まり、傷口が閉じ、患者からも笑顔が見られるようになりました。現在では再び独力で歩けるようにリハビリを開始しています。

また、同じく前回書きました腸チフスの四歳の患者は、その後元気に退院しましたが、しばらくして腰が痛いとのことで、わざわざイスラマバード近くの村から父親が子供を連れて来院してくれました。父親があのとときの感謝を述べ、父親にうながされ、子供が私に恥ずかしそうな顔をして握手をしてくれました。

また、前々回書きました、てんかん重積発作を起こして入院し、元気に退院した十五歳の女の子の患者ですが、残念ながらその後亡くなったそうです。ある時、肩が痛いというので母親と共に来院され、その後の患者の様態を聞いたところ、母親が夜中に、すでに亡くなっているのに気が付いたとのことでした。この患者は以前同じ症状で公営の病院に連れていったところ、「この患者はもうすぐ死ぬから連れて帰りなさい」と見放された患者でした。その後我々の病院に連れてきて、スタッフみんなの、不器用ですが献身的な治療で良くなった患者です。母親は娘を亡くし、悲しそうでしたが、あのとときの我々の努力に対して礼を述べ帰って行きました。

新時代

六月中旬には、アフガニスタンのカーブルにお

ける診療所建設の可能性を探るために、診療部長のディア先生と一緒に、カーブル周辺の状況調査に行きます。その後、らいの多発地帯である、アフガニスタンのワハン回廊近くのラシュト村に再び行きます。そこではフィールドワークをかねて、今後の本格的な常駐体制での診療を開始するための、診療所の建設現場を探しに行く予定です。

また、癩の多発地帯であるコーヒスタンでは、政府の診療所が正式に貸し出される許可を得ることができました。この診療所は十年以上前から、政府が医師を迎えるために建てたものですが、全く希望者がいないため、長期間放置されていた建物のようにです。大都市では医者が余っているのに、地方には全くといっていいほど医師が足りないようです。こちらほどではないですが、日本でも同じようなものです。とにかく、新病院の建築の他に、新診療所の準備も着々と進んでいます。中村先生は、「ペシャワール会はそろそろ新時代に入りかけている」と言っておられました。

さて私は、七月に帰国し、しばらく徳之島で働かせていただき、九月に妻と子供二人を連れて再びこちらに戻る予定にしています。最近パキスタン、インドの両国で悲しい出来事がありました。パキスタン国内のNGOもこのことで撤退を開始しているところがあると聞きました。中村先生は「我々ペシャワール会は従来の方針通り、政治、宗教には関知せず、患者のために活動を続ける」と言っておられました。実際、困っている患者には政府間の問題など全く関係のないことです。このことで患者に影響が出ないことを祈るばかりです。

今こそ目の前の患者と 向き合う時

PMS看護婦

藤田千代子

核実験をめぐる

安否をたずねる日本からの電話が、一日に何本も鳴り始めました。インドに続き、考える間もなくパキスタンが核実験をしたからです。連日、新聞には核実験が成功したことを神に感謝する祈りをする人々の写真や、教授と呼ばれる偉い人たちが、「良いことをした」などとコメントする記事が載っていました。また、驚いたのは、実験のあったバルチスタンで、実験地から避難している女性や子どもたちが、みな結婚式の時に着るキラキラしたおしゃれを着る身につけて、嬉しそうにチャールパイに座っていたことです。ペシャワールでは、若者がバスの中にも天井にもぎっしり乗って、ピーピーワーワー騒ぎながら、車に大きな国旗を掲げて走っていました。ペシャワールでさえこうですから、大都市のイスラマバード、カラチ、ラホールではもっと激しかったことでしょう。ラジオでは有名な議員がインタビュアーに答えて、「これで我が国が他の国より小さいということではなくなった」と言っていました。識字率数%と言われているこの国で、どのくらいの人々が、核の恐ろ

しさや意味、実験後の生活がどのようになるかを理解しているのか……。

国が二つあるような所

パキスタンで生活するようになって、しばらくしてから分かってきたことは、貧富の差が余りにも大きいことでした。宮殿のような所に住み、召使いを何人も抱えている家があれば、テントで生活していたり、山岳地方のらしい患者さんのほったて小屋のような家もある。ペシャワールにもそういう人たちは大勢います。数年前、こちらでも衛星放送が入るようになって、私たちの住んでいる高級住宅街では、殆どの家にパラボラアンテナが付いています。イスラム教国ということで、国営放送では、ドラマのラブシーンや、他国のホテル案内でフラダンスをする女性の身体には必ずモザイクを入れて放送しています。その反面、衛星放送では何もかもがそのまま放送されています。で、それを見ているのは金持ちであり、知識人なのです。こんな所もあれば、私たちが三年前から診療を始めている医療過疎地のラシュトには電気もガスもありません。

ペシャワールには「ドクターマンデー」（医者市場）と呼ばれる場所があります。「ドクターマンデー」とはよく言ったもので、あるビルでは一階がすべて薬屋になっていて、二階、三階、四階すべての各部屋に医師がいて、診療をしているのです。もちろん診療代はとて高く、こういうビルがいくつも存在します。あまりの貧富の差に驚いて、私は赴任当時から、ここは二種類の人



スタッフと打ち合わせをする藤田看護婦

間がはっきり別れて成り立っている国だとか、国が二つあるような所だと感じていました。

もちろん私たちが関わる相手は、病気を治したくても病院に行くバス賃がない、診察を受けたくても検査代がない、医師に処方箋を書いてもらってもその薬を買うお金がない、手術代がない、注射液は買えたけど注射器が買えないというような、貧しい人たちだと思いながら、今までやってきています。

国や政治を論じるのではなく

パキстанは今度の核実験で、数カ国からの経済制裁を受け、今までのインフレがさらに続き、医療から遠かった人たちはますます遠ざけられるでしょう。新聞やテレビ、ラジオで、国のために、国民のためにと発言している人々は、大抵、みなお金持ちだから、風邪をひいてもすぐ高名な医師に診療してもらえるのです。

本当に困っている人たちは昔から同じように困っている人たちで、だからこそペシャワール会がここにあるのだと思います。今こそNGOの底力の出し時のような気がします。国と国では他国との関わりもあるでしょうから、いろいろな良い対策はあっても、それが実行されるとは限りませんが、ペシャワール会は、日本人の一人一人の気持ちで、この国の一人一人に伝えることが可能なのであり、私たちはそれを、医療を通してやっているわけです。マザー・テレサが言っていました。「私たちは、国や政治を変えようと考える行動しているわけではありません、目の前で困っている一人一人に対して行っているのです」と。今こそ、その言葉の意味を噛みしめています。

中村先生も言っていました。

「アフガニスタンがどうの、パキスタン、インドがどうのと言うんじゃないくて、私たちや目の前の患者が良くなつて、喜んで村に帰れば、それでいいんじゃないか……」。

トム君との二ヶ月

PMS放射線技師・鍼灸師

林 達男

ペシャワール会員の皆様、お変わりありませんか。

パキстанは天候異常で、近年に無い長雨で病院建設が少々遅れております。計画の八〇パーセントの工程ですが、落成式は昨年予定しております通り、四月二十六日、日本より会員の方々が六十名ほどの参加で、盛大にとりおこなうことが出来ました。病院の工事は現在も進んでいます。

小生は五月四日に帰ってきました。ペシャワール会報の五五号で報告した、筋ジストロフィーのトム君のその後ですが、四月七、八、九日がパキスタンのイスラム教の社会ではお祭りに入ります入院中の患者さんも家でそのお祭りを祝うのと、家で帰ってしまいます。したがってトム君も五日に家に帰るのだと、私服に着替えて大変嬉しそうです。記念にと思って親子の写真を撮りました。小生は祭が終わったなら直に帰院されると思っていました、小生が帰国するまで帰院されませんでした。

それでもトム君と過ごした二カ月間は楽しい思い出となりました。今となつては、小生がアフガ

ニスタンに入ることでもできず、近い将来にアフガニスタンに平和が訪れたときには、カーブルのトム君を訪ねていけることを祈っています。五六号の会報にトム君のその後の報告をと思つて筆をとりましたが、胸が一杯になり、書くことができません。今回の報告はトム君の治療経過を写真で報告したいと思えます。悪しからずお許し下さい。最後に、皆様方のご支援により、現地活動を続けさせていただいておりますことを、心より感謝申し上げます。

一九九八年五月二十九日



故郷カーブルへ帰る直前のトム君（右はお父さん）

●新病院落成式ツアー参加体験記

満開の桜を

待ちわびながら

ペシャワール会名古屋支部

五井泰弘

多くの人の善意に触れた一年

名古屋とペシャワール会、中村先生との結びつきは、村井澪一さんや名古屋サウスイオンズクラブを介して十三年前からのものでした。そしてこの流れを定着、整備するために支部を作ったのが九十六年二月のことでした。

名古屋支部のこの二年間は、病院建設募金と会員拡大活動そのものでした。目標額を、サウスイオンズの一〇〇〇万円を含め、二〇〇〇万円の計画を立てました。もちろん達成の見込みもあるわけでもなく、自信も全くありませんでしたが、恥をかく覚悟はありました。結果は、とてもそこまではいきませんでした。多くの人たちの善意や温かさ、そして支援の広がりを見ることができました。そのことに大変満足しています。もちろん村井さんの熱意は言うまでもありません。

名古屋から十九名（全国から総勢五十九名）がツアーに参加しました。急用などで行けなくなった三名の思いを背負って飛び立ちました。私自身初めてのバキスタンで、会報や本でしか、現地のことは知りませんでした。

視線にひるむ

イスラマバードに降りた時、人の多さは中国などで経験していたのですが、加えて到着したのが夜だったこともあり、人々の目が何と鋭かったこと。一瞬ひるむ気持ちでした。

四月二十六日の開院式は晴天に恵まれました。周りののかな麦畑の中にひととき大きな建物、立派な新病院でした。前日は大変な雨で、式の場所を広場から建物の屋上に急遽変更したとのこと。中村先生はじめスタッフの徹夜の努力を聞き、式典の前に、より一層胸が熱くなるのを感じました。

多くのバキスタン人、アフガニスタン人、我々日本人、そして現地スタッフの方々が国、民族、言語を越えて一同に会衆し、待ちに待った新病院の素晴らしさと、参加者全員の輝く目を見ました。それは空港に降りたつた最初の印象とは全く逆で「感動」そのものでした。

今回、全通の組合員の皆さんが取り組んだ一〇〇万円のカンパや名古屋サウスイオンズの牧野圭佑さんのご尽

力で、パソコン、ワープロなどを持っていきましました。そして何とんでも桜の木を新病院に植えて、募金と交流の証を残したいというのが、早い段階からの考えでした。

許可のため東京のバキスタン大使館へ二度ほど出かけたり、電話とファクスで進まない手続きには困りました。四月二十六日成田の出発前夜に植物検査を済ませたりとヒヤヒヤもので、スリルも味わいました。

開院式後、全員で植樹と記念撮影を行いました。六十本の桜の苗木が育ち、PMS新病院に満開の桜が咲くことを楽しみにしています。そして最後に、全国から参加した五十九名の皆さんとの出合いを今後も大切にしたいと思えます。

十八年ぶりの

カイバル峠

八尾ペシャワール会
岡崎ヒロ子

思いがけなく、仕事上の追突事故にて、計画中のツアー参加については少々悩みもしたが、行かない方が余分にストレスになる、との勝手なる判断で、知人の板垣先生も来るし、と一杯理由づけをして参加した。すごい荷物

と共にバキスタンに入った。開院式は天候不順で、準備の苦労がしのばれた。参加者へのレイの手渡しにびっくりし、何だか緊張してしまい、事の重大さを初めて認識させられた。病院入口のレリーフを感無量で読んだのは、私一人ではあるまい。式典後の午後のセレモニーではグリーンティが振る舞われ、アイスクリームを食べたりしながら、バキスタンならではの雰囲気の中で、バキスタン、アフガンの民族文化を楽しむこともできた。

翌日JAMS、PLSを見学し、いろいろと説明も受け、男性と女性の診療日が別々であるというシステムの話



開院式での植樹祭風景



カイバル峠でのツアー一行の記念撮影

を聞きながら、今さらながらイスラム社会での病院の運営の難しさを感じた。翌日はカイバル峠行きの許可が出て小躍りした。十八年ぶりである。あの夏は、鉄道でカイバル駅まで行ったのである。ところが、せっかく着いたのに、同行者が来年の入山の手続きのため、引き返そうと言いつつ出したりで、蹴飛ばしたい思いにかられながら渋々Uターンしたという、あの日以来のカイバル峠だった。

ところで、同行の布施さんとペシャワールの旧知の知人に再会したり、バザールで体調をくずしたり、さらにはアラビア海も見ることが出来た。途中で帰国された方々、もし次回があれば、その時は新病院が始動していることでしょう。その時を今から楽しみにしています。

人々との出会いが

印象的でした

ペシャワール会関東連絡会

巻島規之

初めはただ「何となく」

私がペシャワール会へ入ったのは、一昨年の十二月でした。その頃、大学で国際協力について学んでいましたが、実際にそれに関わったことはなかったもので、とりあえず何かやってみよう、それだけでした。ただ関東連絡会のみなさんと出会えたのは幸運でした。私一人では、開院式ツアーに参加しようとは思わなかっただろうからです。パキスタンの話やペシャワール会に関する様々な話を聞いたことで、ツアーに参加してみようと思いついたのです。

私にとって初の海外がパキスタンだったわけなのですが、見てきた風景、景色にそれほど感じるものではありませんでした。テレビや写真などで似たような光景を見過ぎてしまっていたかのように思います。やはり私を引きつけたのは人との出会いでした。パキスタンの人たちとの出会いもそうですし、一緒にツアーに参加した方々との出会いもそうです。

パキスタンが身近になった

私は人に話しかけるのが苦手な方ですが、大きなカメラを持っていたことが幸いでした。パキスタンの人たちは写真を撮ってもらうことが好きらしく、みんな寄ってきて、写真を撮ってくれ、とせがむのです。中には足をかがしっているのに、レンズの中に入ろうと寄って来た人がいたくらいです。子どもたちは揃ってカメラの前に並びます。そうしてカメラの前ではみんな笑顔でポーズをしてくれました。また、会員のみなさんとも色々なお話しをし、考えさせられることがたくさんありました。みなさん活動的な方ばかりで、自分ももっと頑張ろうという気になさせてくれました。

肝心の開院間近の病院に関してですが、これについては、自分自身反省しなければならぬことばかりです。中村先生をはじめとする、ペシャワールで医療活動をなさっている方々やベッドで寝ている患者さんたちを見て、もっと自分自身ができるか考えてみようと思いました。それまではただ何気なくやっていたに過ぎないような気がしたのです。現地を実際に見た今、特にそう思います。

今回のツアーで、パキスタンがとても身近に感じられました。その分考えさせられることが多かったのです。ただ日々の生活に戻ると忘れがちになってしまうことも事実で、すぐにでもまた行って、感じたことを思い出したいくらいです。

開院式ツアーの旅程

4・24

午前十時、成田空港集合、結団式。パキスタン航空・シルクルート（北回り）便にて、現地活動用の医療物資ほか約一トンとともに、成田発。現地時間二〇時、首都・イスラマバードに到着。そのまま市内のホテルへ。

4・25

イスラマバードからガンダーラ最大の遺跡・タキシラへ。古代の僧院などを見学。その後ペシャワールへ。新市街を見学。

4・26

PMS開院式に参加（全現地スタッフ・現地州政府関係者・病院付近住民の代表は約四〇〇人が列席）。式典では参加者全員で「さくら」を合唱。夕方、急ぎよ決まった北西辺境州首相招待の晩餐会に参加。（ここでは招待への感謝を込めて「ふるさと」を合唱）

4・27

小林医師、藤田、蓑島看護婦の案内の下、現在のPMS・JAMS両病院を見学。午後、ペシャワール博物館を見学。アフガニスタンとの国境、カイバル峠へ。

4・28

ペシャワール発、航空機でカラチへ。アラビア海を見学。早朝、カラチ発。北回り便にて帰国。夜、成田着。

4・30

●ペシャワール・開院式準備滞日記

*

瞬く間に過ぎた
三週間でした

ペシャワール会事務局

石松須美子
鎌田 興代

「開院式準備の手伝いに来てくれませんか」。

中村先生のこの言葉をきいたのは、昨夏のことだった。学校や職場がある若い方々は無理だが、私たちには可能だ。しかし、具体的に準備を始めたのはもう三月になる頃だった。医学生達と七人でペシャワールを訪ねてからはや二年一カ月が経つ。今回は約三週間足らずの滞在であったが、まさに多くのことを経験し、スタッフの皆さんに感謝の思い一杯で帰途についた。

「常識」は「非常識」——スタッフ宿舎事情

中村先生はじめワーカーの皆さんが生活しておられるスタッフハウスのことについて書いてみたい。私たちがうかがった時は、七人の方が寄宿しておられた。大きな民家である。庭の花々も美しかった。小住宅に慣れている私たちは、まずこの広さに驚いた。しかし、「古い」のだ。給水、排水状態がよくない。暑い季節は十時過ぎから窓などは閉めるように言われる。「風通し良く」の私たちの常識はここでは非常識。主な部屋はバス、

トイレ付だがすべての部屋に付いているわけではない。共用のバス、トイレがあれば便利なのに……とはこれまた日本式住居に慣れている私たちのみの感想かも知れない。

「これは大変！」——式典準備のこと

一週間後に迫っていた重大イベント、開院式。当然その準備万端は整い、そのスケジュールの下で多少の不足を補うだけとの私たちの予想とはどうも違うようだった。度重なる会議。深夜まで続く。スタッフ皆さんの疲労が滲む顔つき。小耳にはさむ情報だけで、これは大変！と思った。アフガン・パキスタンの伝統的対立がこういう場にも顔を出す。「PMS」の「P」はパキスタンの「P」ではない、ペシャワールの「P」だ」との説明も必要であったとか。私たちは開院式の招待状づくり、名札作りも手伝ったのだが、二、三週間前にはすでに発送済みのはずでは、との常識も私たちの常識に過ぎないのだろう。

私たちの滞在中、患者さん（かも知れないが、十分元気と思われる人）が現れて、ゆっくりお茶を飲む。その少し前に、慌ててお茶を飲み、やるべき事を急いでいた私たちには何ともその様子が奇妙に思われ、「あなたも手伝ってよ！」と、思わず口にしそうになった。しかし、私たちのこのせかせかした態度の方がこそが奇妙であったのかも知れない。全世界の目がこの地に注がれた時も、多くのNGOがこの地を去った時も、戦争・民

族・国家の対立がいかにあれ、この十五年間、この地で、この人々の只中で、中村先生はさわがず、あせらず医療活動を続けてこられているという事実を改めて思う。そして四月二十六日、雨上がりの清々しい日に、内外の多数の列席者を集め、開院式は無事、盛大に行われたのだった。

蠅に四苦八苦——台所事情

二年ぶりの台所。以前とは少し変わっていた。戸棚が付いて、大きな冷蔵庫が備わって、いろいろな食料品が出番を待っている。後片付けをしにくる青年、カダム君もいて、以前に比べよく片づいていた。彼はアフガン難民だった由。以前は病院で器材管理の仕事が担当だったという整頓好きの彼は、洗った食器の置き場所を違えたことがない。

蠅が飛び回るので、スタッフハウスにあった蠅とり紙を私たちが台所と食堂に下げた。食事時になると芳香に誘われて飛来し、うるさく飛び回るのを「蠅打ち」で叩くのだが、滞在中の松本さん、林さん、そして私たちは昔の経験が物を言った。

はち切れんばかりに詰め込んだトランク。その重さに振り回されそうになりながら持参した、米五キロその他諸々の食料品。滞在中の夕食は日本食を中心にした。高野豆腐と椎茸の煮物、胡瓜春雨の酢の物、切り干し大根の煮物、茹藕と葱の酢味噌和え、イカとワカメの和え物等、日本の調味料で味つけた。スタッフの皆さんの食事は、朝昼はそれぞれ各自でパン又はナンに紅茶又は牛乳、あるいはお茶だけの日もある。昼はご飯だけ用意

していれば有り合わせの佃煮、漬け物、卵や前日の残り物を食べる。夕食だけが私たちの出番だった。夕食の時刻は午後六時の決まりだが、各々仕事や勉強で全員が揃うことは殆どない。滞在中は、夕食の時間に間に合うよう台所に入った。経験のみが頼りの大雑把人間と几帳面人間の二人のコンビで、台所の会話も弾み、立ちづくめの時間も瞬く間に過ぎた。

たかが買い物、されど……—買い出しのこと

「気温が高いので脱水症状にならないように」との中村先生の言葉通り、日中は特に暑かった。が、汗は出ない。午前中の少し涼しいうちに近くのバザールに買い出しに行く。二人の共通財布を握りしめ、傘と帽子で陽を遮り、木陰を選んで市場まで、殆ど男性ばかりの道を、緊張しながらも、少し顔馴染みになった店で、葱、トマト、ピーマン等々いろんな野菜を買うのだが、蠅が多いのが気になった。少しでもきれいな品をと、時にはバザールから運んで荷下ろししている品にサツと手を出したり、たかが買い物だが、ちよつとした技術が必要である。

約三週間の滞在中、開院式参加の皆さんからいただいた日本各地のお米で作ったおにぎりが好評だったこと、赤飯を炊いた小林先生の誕生日の夕食時には全員が揃い嬉しかったこと、早起きの私たちに、検査技師の松本さんが、事務局の樋口さんが焼かれた茶碗でたてて下さったお茶の味など、どれも忘れることのない思い出である。

●春のスタディ・ツアーに参加して モスクの静寂

九州大学医学部三年 永田智美

静寂

かつてこれほどの清浄な静寂を、私は知らない。今回現地の医療活動を見学させていただく機会に恵まれ、春休みを利用して二週間ほどペシャワールに滞在させていただいた。その合間に訪れたイスラムのモスクで感じた、正直な感想がこれである。

雑然としたバザールの中で、それは別世界であった。不思議な静寂がその場を支配していた。夜の深く澱んだ静寂とは、全く趣を異にする透明な静寂。微かな衣ずれの音に、さざなみがきらめくように、時折空気が揺れる。敬虔なイスラム教徒達が、床に頭をすりつける祈りの動作を繰り返している。この侵しがい清澄な空気は、彼らの周囲から発せられているのに私は気付いた。そして同時に、この静寂が静かに、しかし抗いがたい力で私の心の奥底に入り込み、泉のようにそこを満たすのを感じた。それは不思議な感覚であった。初めての感覚のはずであるのに、何故か心懐かしい——。

そこで、ふと感じた。この感覚、何か人知の及

ばない大きな力の前にひれふ感覚とは、本来誰もが持っている感覚なのではないだろうか。神の前に跪くとは、裏を返せば人間である自分の弱さを、認めてやることではないのだろうか。私達日本人は、日々の生活に追われ、自分の弱さを押さえ付け、肩肘張って生きて、気が付かずに自らを疲弊させているような気がする。祈りとは、ありのままの自分を取り戻す手段なのかもしれない、などと不信心な事を考えたものである。

「私ができるのだろうか？」

しかし、これらの思いは、私自身が自分の弱さを否定し、無理をして生きていることから生じるものではないか。事実、現地の医療活動を見学させてもらいながら、医学生でありながらも二学年を終えたばかりで医学的知識に乏しく、語学力も不足の私が、本当にここまで来た意味があったのだろうか、などと考える始めていた頃であった。一体私に何が学べるのだろうか、何が出来るのだろうか——。

そんな思いを洗い流してくれたのがあのモスクの静寂であった。私はありのままの私で、学べることを学んで帰ればいい。医学生だからといって無理に医学のことだけを学ぼうとしなくてもよいではないか。そして、この滞在中感じたあらゆる感覚を、大切に日本に持ち帰った。

そして日本に帰った今、現地の医療活動のために、今の私でも協力できることをしたいと、毎週水曜日は事務局へ足を運んでいる。

●事務局だより

「汝罪無き者のみ石もてその女を打て」

という聖書の句は、罪にまみれた人間の傲慢と無力に対する深い洞察に基づいています。インド・パキスタンの核実験の深淵をたどれば、アメリカ・旧ソビエトによる核軍備競争だけでなく、人類史的に人間存在の罪と矛盾を問うことになりました。中村医師は、今回の核実験について問われ、「極貧の患者に罪を負わせる道理はない」と書きました。私たちは、同じ人間の行った行為から目をそらすことなく、ここまでと変わること無い現地活動が続けていくことになるでしょう。

病院の開院式を四月二十六日に開くことが出来ました。実質的なオープンは九月に持ち越されましたが、六十人を越える現地訪問は、会のこれからの推進力として絶大な力を発揮するものと信じます。セレモニーの席上、北西辺境州の知事が述べられた「たくさんのNGOが立ち去るなか、ペシャワール会のみがこの地に踏みとどまり続けた。そのことに敬意を表します」という言葉を肝に銘じたいと思います。今年度の会計報告中「事業の推移」のグラフを見ると、九七年度分がかなり小さくなっています。九

六年から始まった「病院建設費」に関係あることをご勘案下さい。

●ペシャワール会ハンセン病院建設基金

郵便振替 〇一七三〇一九一三二四二一

⑤村から

月

事務局の夜は、午後七時を過ぎる頃から俄然にぎやかになる。作業の手を休めることなく、同時に様々な話題が飛び交う。五月の話題の中心は何と行っても新病院開院式に出席したメンバーのお土産話であった。新病院並びに式典の立派さ、賑やかさに始まり、現地スタッフの苦労やバザールの話など、話題は次々に連鎖し止まることがない。最近ではパキスタンの核実験や円安による資金難にも話が及び、それどれもがこれまでの私の生活では全く知ることのできなかった世界であり、新しく耳にする地名も多い。それらを確かめたくて、私は最近、新しい地図帳を買った。しかし、目の前の厳しい現実が、ここで語られると不思議にユーモラスに聞こえるのは何故だろうか。ともかくそんな和やかな時間に参加したくて、ここ四カ月、妙にいそいそという感じで出席している。(大)

ダラエ・ヌールへの道

—アフガン難民とともに

中村哲 四六判上製三二六頁 本体二〇〇〇円

ひとりの日本人医師が、現地との軋轢、日本人ボランティアの挫折、自らの内面の検証等、血の噴き出す苦闘を通して、ニッポンとは何か、「国際化」とは何か、を根底的に問い直す渾身のメッセージ

石風社

福岡市中央区大手門一八八
電話 〇九二(七一四)四八三八

ペシャワールにて [増補版]

中村哲 四六判上製二六〇頁 本体一八〇〇円

石風社

福岡市中央区大手門一八八
電話 〇九二(七一四)四八三八

アフガニスタンの診療所から

中村哲 B6判並製二〇〇頁 本体一〇六八円

筑摩書房

東京都台東区蔵前二一六四
電話 〇三(五六八七)二六七〇

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局をFARA HOUSE
(〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇・二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三二二・三七二二) 内におく。